

ゆりやんレトリィバアとミス・ワカナ ―魅力的な女性芸人について―

古川 綾子

一〇代の頃に芝居とコントや漫才、落語を好きになって、公演チケットや関係する古書と雑誌、CDに小遣いとアルバイト代を費やした。高校二年の時、こまつ座の座付作家・井上ひさし先生にファンレターを出したら、数日後にとっても丁寧な返信を頂戴した。芝居の感想についてお礼の言葉があり、「自分よりも素晴らしい作家が綺羅星のごとくいます。たとえば、樋口一葉、宮沢賢治、太宰治、室生犀星……」と作家の名前が列挙してあった。手紙の最後は、「どうぞたくさん本を読んでください」と結ばれていた。

高校卒業後は働くつもりでいたが、書かれてあった作家の作品をできれば全部読んでみたいと思い、このことをきっかけに進学を決めた。観劇のたびにファンレターを書き、何度も返信をいただき、好きな劇団や芸人さんも増えて、ますます演劇や演芸の魅力にのめり込んでいった。チケット代のためのアルバイトばかりして大学にはあまり行かなかったが、そんな生活をもう少し続けたいという気楽な考えから大学院に進み、当時夢中だった桂米朝の著作をきっかけに上方落語の近代化に関する修士論文を提出して、以来二〇年、上方演芸・喜劇の近現代史を研究テーマにしてきた。

いまでも月に一〇数回は劇場や寄席に足を運ぶ。中川家の漫才や東京03のコント、吉本新喜

劇と松竹新喜劇、志村けんの座長公演、こまつ座と大人計画、劇団☆新感線、蜷川シェークスピア、そして落語や文楽、歌舞伎など、毎週末どれかのチケットの先行発売があるため、土曜の午前中はなるべく仕事を入れず、必死になってチケットを獲得して、無事に確保できると無性に嬉しく、半年、一年後の公演を心待ちにしながら生活している。

二〇一九年の私的ベスト3は、一位・ゆりやんレトリィバァ JAPAN ツアー大阪公演（七月一二日なんばグランド花月）、二位・松尾スズキプロデュース東京成人演劇部 vol.1「命、ギガ長ス」大阪公演（七月二九日 Itoail）、三位・ジャルジャルツアー二〇一九「元号まだいじゃねえよー」大阪公演（四月三〇日梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ）とマツモトクラブの初単独ライブツアー「ジャンピング」大阪公演（七月七日 SPACE9）。とくに女性芸人「ゆりやんレトリィバァ」の二〇一九年の活躍は目覚ましく、芸歴二〇年目の友近とのユニット「ブルース・シスターズ」（大阪公演、一月一八日森ノ宮ピロティホール）でも五都市ツアーを成功させて話題を呼んだ。

芸歴七年目のゆりやんレトリィバァは、芸人養成所のNSC大阪校を首席で卒業後、キレのある動きを活かしたギャグと独創的な設定の一人コントで新境地を切り開いてきた。二〇一七年二月のNHK上方漫才コンテストでは女性ピン芸人初の優勝者となり、同年に始まった『女芸人ZOO』決定戦THEW』でも六三六組の頂点に立って初代チャンピオンの称号を得た。二〇一九年六月、アメリカのオーディション番組『アメリカズ・ゴット・タレント』に出演した際も、奇抜な衣装で得意のダンスネタを披露しただけでなく、審査員の質問に英語でボケ続けて番組を盛り上げた。

二〇年ほど前からテレビに出演する女性芸人は増える一方だが、そのほとんどは女性タレン

トに転身してしまって、漫才やコントなどの芸（ネタ）を披露しつづける芸人さんは、海原やすよともこ、友近など、ごく限られている。どんな番組でも果敢にボケつつけて、貪欲に笑いをとりにいくゆりやんレトリィバァは、これまでにないタイプの女性芸人であり、今後ますます目が離せない。

芸風とキャリア、そもそも時代が違いすぎるのだが、独創的な笑いを生み出し男性芸人と対等に扱われ、人気を競い合った先駆者として、まず思い浮かぶ女性芸人といえば、漫才師のミス・ワカナ（一九一〇—四六）である。

一九三〇年代から四〇年代に活躍したミス・ワカナは、一五歳で島根から大阪へ出てきて河内家小芳と名乗り、漫才の初舞台を踏んだ。無声映画の楽士だった後の玉松一郎と大恋愛の末、一九二八年に結婚して、夫婦でコンビを組み、中国大陆を含む各地を巡業しながら漫才のテクニクを磨いた。一九三七年に吉本興行部にスカウトされて、漫才の本場・大阪の寄席に出演すると、瞬く間に売れっ子芸人の仲間入りを果たす。一九三六年の吉本興行部の専属漫才師は、エンタツ・エノスケ、アチャコ・今男、以下七三組で、ワカナ・一郎は七四組目のコンビとして専属契約を結んだ。当初はいわゆる“ドサまわり”の格下芸人として扱われ、一組目、二組目に出演する浅い出番だったが、わずか二カ月でトップクラス数組の漫才師と同じ出番が用意されるほど、短期間に頭角を現した。

二人の漫才の特徴は、女性上位のスタイルと、ワカナの“しゃべくり”のテンポ、さらに音楽的要素をふんだんに盛り込んだところにあった。体格がよくおっとりした雰囲気の一郎を、小柄で可愛らしいワカナが、上品から下品まで様々な言葉を緩急自在に操り、圧倒的な話芸でもってやり込めてしまう。最初から最後まで女性がリードする漫才は、当時の世間一般の男女



ミス・ワカナと玉松一郎のレコード「漫才 ワカナ放浪記」歌詞カード（ビクター 1939 年）

の位置を逆転させた斬新なものだった。一九三〇年にエンタツ・アチャコが考案したしゃべくり漫才の特徴は、かみ合うようでかみ合わない、ボケとツツコミの会話の「間」のおもしろさにあったが、ワカナ・一郎はしゃべくり漫才に独自の工夫を凝らした。

簡単な読み書きにも不自由したワカナだが、どんな音楽も一度聴いただけで歌えるほどに音感が鋭く、天性の勘のよさにも恵まれていた。アコーディオンを抱えて舞台に立った最初の漫

才師である一郎は、もともと音楽家志望であり、チェロやドラムを演奏するプロの楽士だった。歌をうたう漫才師はいても多くは音頭出身で、ビブラートがかかった音頭流の歌い方が一般的だったが、一郎に西洋式の歌唱法を学んだワカナは、アコーディオンの伴奏にあわせて謡曲からジャズまでなんでも歌ってみせた。また、はじめて洋服を衣装にした漫才師はエンタツ・アチャコだったが、女性漫才師ではワカナが一人目である。ドレスのような舞台衣装だけではなく、ツーピースなどの普通の外出着をおしゃれに着こなした点も新鮮だったという。ちなみにワカナの「ミス」は“miss”ではなく、“mistake”からとったシャレである。

二人の漫才はSPレコードで残っており、国会図書館の歴史的音源（国会図書館および歴史的音源配信提供参加館館内限定）として二七タイトル公開されている。また、一九三九年封切の主演映画『お伊勢参り』（新興キネマ京都／監督森一生／脚本依田義賢）にも短いとはいえ漫才を演じる場面がある。ワカナの考案したギャグでいまも使われているものは数多いが、品のよい言葉づかいで話していたのが、突如「ええかげんにさらせ」とか「なんぬかしてけつかる」と、ガラ悪く一転する落差ギャグと呼ばれるものがあり、ミヤコ蝶々や京唄子、現在では吉本新喜劇の未知やすえら、女性芸人に継承されている。

伝説の漫才師ミス・ワカナの波乱に満ちた人生は、舞台『おもしろい女』という作品によって、ある意味いまも語り継がれている。『放浪記』と並ぶ、名優・森光子の代表作『おもしろい女』は、一九七八年の初演から二〇〇六年までに森光子の上演は四六三回を数え、二〇一五年からは藤山直美の主演で上演されている。初演の舞台では、森光子と芦屋雁之助（玉松一郎役）が同時に文化庁芸術祭大賞を受賞しており、二〇〇四年には段田安則（玉松一郎役）が菊田一夫演劇賞、二〇一八年に文化庁芸術祭大賞、二〇一九年に芸術選奨文部科学大臣賞を受賞

するなど、数々の賞に輝いてきた作品である。

一九三九年、吉本興行部から新興キネマ演芸部に引き抜かれた直後のワカナ・一郎と、舞台で共演した、当時一九歳の森光子は、ワカナから「森みっちゃん」と呼ばれて可愛がられ、主演映画にも声をかけてもらったという。森光子の自伝からも、「映画を撮れば必ずヒット、舞台に出ればひと月満員で、高座もお客はびっしり。三回公演だと二回しか出ずに帰ることもあります。内心ずるいと思う人もいたようですが、そんな特別待遇が認められるほどの大スターで、まわりは始終びりびりしていました」（森光子『人生はロングラン私の履歴書』日本経済新聞出版社・二〇〇九年）と、ワカナが別格扱いのスターだったことがわかる。また、漫才についても、「男性優位の世の中で女性上位なのは漫才くらいでしたから、新鮮な驚きでした」、「毒舌のワカナさんは誇り高い天才でした。私は初めて漫才のすごさを知ったのです」と特筆している。

私が『おもしろい女』をはじめて観たのは、一九九八年二月の日生劇場での公演だった。修士課程に在学中の二四歳の時で、上方漫才の歴史について書かれた本の中でしか知らなかったミス・ワカナを、当時七七歳の森光子の身体を通じて知り、芸人としての「凄み（迫力）」に圧倒された。その後も、二〇〇六年四月の森光子の大阪公演と、藤山直美による二〇一五年六月の東京公演と二〇一八年十一月の兵庫公演を観てきた。実録物の演劇の魅力は、モデルの人物と演じる俳優とが、重なり合ってみえるところにある。戦後まもなく三六歳の若さで急逝したミス・ワカナだが、二人の名女優によって、上演のたびに現代によみがえり、稀代の女性芸人としていまも輝きつづけているように感じられる。

（国際日本文化研究センター助教）